福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

母語と連携する外国語教育の教材開発に関わる協働的実践研究：教科書を生かした授業実践事例を通して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2020-04-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 王, 林鋒
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10871

母語と連携する外国語教育の教材開発に関わる協働的実践研究

教科書を生かした授業実践事例を通して

王　林鋒

Ⅰ．協働的実践研究の意義

1．教職大学院のスタッフとしての心構え

2016年4月に福井大学教職大学院に着任して、今年で3年目を迎えた。福井大学教職大学院における院生の学習を支えるスタイルは、伝統的な講義型のものではなく、実務家教員と研究者教員がチームとなり、院生の学校現場に足を運び、授業や学校の課題に協働で取り組むというものである。いわば、学校拠点の協働実践研究が10年以上実施されている。院生たちは、実践と省察を通して、専門性を高めていく。私は、学校現場と密接に関わることに憧れ、福井大学教職大学院が長年蓄積してきた協働実践・事例研究のアプローチを自分も大切にする覚悟を着任当初から持っていた。その際、研究者として学校現場との協働研究を進めるにあたって、一つの原則を作った。それは、**自分の意志を相手に押し付けるのではなく、相手が自らやりたいことを支える**ということである。

個人の研究テーマに基づき、論文を執筆するための材料やデータを収集するため、ある取り組みを実践してほしいと学校現場に協力を求めることが少なくない。もし持ち込んだテーマが、学校が直面している課題や教員の問題意識と一致すれば、議論する意味があるが、全く学校の現状と無関係なことを一方的に説明され、やるように勧められても、現場を困らせるだけだ。例えば、授業研究が定着していない学校、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ（以下、PLCと略す）がまだ形成されていない学校の教員に、先進校の探究型授業の実践記録の見本を見せ、書かせた。その結果、教師主導授業のスライドを説明する文章に留まってしまった。一見すると教員の力量形成向上のためだと見えるかもしれないが、探究型授業の実践をやったことのない教員に、授業の展開プロセスを描くような実践記録を書かせるのは最適な方法であろうか。その学校に適していない先進校の取り組みを丸ごと行わせるような指導モードにしてはいけない。私たちは、学校や院生の考えや悩みをしっかり傾聴し、課題を共に探りながら、院生や学校の現状を理解した上で、解決方法を一緒に考えるべきである。

2．学校現場教員との関係づくりに関わるエピソード

「自分の意志を相手に押し付けない」という原則を心掛けたつもりだったが、誤解を招くことも避けられなかった。研究者として、自分の無力さを痛感したのは、2018年の4月だった。2018年4月というのは、福井県内の小学校3年生以上で英語が導入され、次期学習指導要領の全県先行実施がスタートした時期である。その時、私は、小学校英語の現状と実態を知るため、面識のある先生に授業参観の申し出をした。

> *先生と一緒に小学校英語の授業を話したいとずっと思っておりますが、なかなかお話する機会はありませんでした。今学期は、一緒に協働探究させていただければ幸いです。これから継続的に先生の授業を参観させていただきたいんです。自分は、現場の経験はほとんどないですが、学ばせていただければと思っております。*

二日後、メールの返信が来た。

> *授業参観というのは、公開授業についてお知*

らせし、公開授業の時に見ていただくということでしょうか？協働探究ということですが、卒論のテーマ等に使われる予定ですか？

メールを見て悔しかった。心の中で「ただ実態を知るために実際に授業を見に行きたいだけで、大学生の卒論に関係ないのに」と呟いた。小学校英語をどうするべきと困っている教員と一緒に考えていきたい、中国で小学校英語に携わってきた経験を活かし自分に何かできることがあれば一緒に考えたいという気持ちでいっぱいなのに、なぜそれが伝わらなかったのだろうかと理解できなかった。自分の気持ちを適切な日本語で表現できなかったことが理由の一つであろう。日常会話ができても、専門的な思考や複雑な気持ちを豊かな表現で表すような的確な日本語が今でもできていない。これは、確かに、Cummins が提示した日常の会話能力という「対人伝達言語能力」と、学問的な思考言語能力という「認知学習言語能力」の違いを表明した一つの例だと考えられる。

その日、もう一回、ことばを吟味し、説明した。一文で言い切れないことを複数の文で表してみた。福井大学教職大学院で学んだことばの一つ「協働探究」をすぐに使ってみたが、意味不明な使い方をしてしまったことに気づいた。**自分の思考のフレームワークで考えたことをそのまま話すと、相手の思考のフレームワークに当てはまらない可能性があり、それが相互理解の壁となる。**

公開授業だけではなく、継続的に気楽に授業を参観することができればと思っております。卒論テーマには関係ないです。協働探究というのは、先生と一緒に小学校英語の実態とこれからを考えていきたいと思っているだけです。先生の実践や研究に私が協力できることがあれば、味方になりたいと思っております。自分の説明不足でご迷惑をかけてしまって、すみませんでした。

前回より、素朴な単語で書いたことに対して、以下の返信が来た。私の意図を理解してくれたようだった。このエピソードで学んだのは、コミュケーションをとる際、一回きりではなく、何回もやりとりする中で相互理解を進めることである。それ以来、仕事上で戸惑ったことや強く主張したいことがある場合、長文になってしまうことが多い。冗長な文章だと自覚しているものの、簡潔かつ的確な表現で伝えることがまだできない。周りの同僚の先生たちの丁寧な日本語を見習いながら、力をつけていきたいと思っている。

私も去年から小学校英語に初めて携わり始めたので、まだ試行錯誤の日々ですが、それでも宜しければ、参観していただければと思います。参観される場合、以下の 2 点についてお願いしたいと思います。・日程が分かり次第、早めに教えて下さい。・参観される際、先生にも英語で話したり、中国のことを教えていただきたいです。児童にとっても、世界観を広げる良い機会となると思うので、ぜひお願いしたいです。

その後、授業参観をしに行った。そして、公開授業研究会に向けて、指導案検討会に参加したことを機に、先生の授業を連続的に見るようになった。途中のやりとりの一部を以下に抜粋した。私の授業参観に対して、最初は戸惑われていた先生が半年間の間に徐々に私を受け入れてくれたようだった。まだ先生の信頼を得たとは言い難いが、信頼関係を築くのには、時間と両者の協働関係を必要とする。いつか、心から私を授業づくりの相談相手にしてもらえるように努力しなければならない。

*先日は授業参観とご助言ありがとうございました。授業についてアドバイスしていただけるというのはとてもありがたいです。ただ明日ですが、英語の授業は*限目の*年生しかありません。*年生は木曜日になっています。木曜日はお忙しいですか？また、教えて下さい。*

３．協働的授業実践を試みた二つの事例

１）院生との協働による小学校 4 年生外国語活動の授業実践

この小学校の授業実践は、当時、教職大学院教職専門性開発コース M3 の池田院生との協働実践である。池田院生は、中・高の英語及び中国語の教員免許を持っていたが、小学校の教員免許を取得しようと教職大学院に入学し、公立小学校で長期インターンシップをしていた。彼が外国語教育に興味を持っていることを知り、中国の小学校英語の教科書 12 冊とともに実際の授業映像を渡し、院生同士にも共有するように声をかけた。彼は、ずっと、英語力及び中国語力を活かした小学校の外国語活動の授業実

践をしたいと思っていた。小学校外国語の授業に挑戦する院生が少ない中、私は「やってみよう」といつも声掛けしていた。授業実践ができるのを知ったのは、2017年10月だった。2018年1月17日に4年生の外国語活動の時間に池田院生が授業実践をすることが決まった。私は、特別ゲストとして授業に関わることになった。

授業づくりのヒントになるかもしれないと思い、小学校の国語の教科書から外国語学習にリンクしそうな内容を検討した論文を勧めた。論文を読んだ池田院生から以下のコメントをもらった。

> *率直な感想として、非常に感動しました。中国語を含む外国語（英語以外）を学習することによって、子供たちの言語能力の向上が望めますし、進路の幅が大きく広がると思いました。また論文の中でリストアップされていた国語科の単元を、すべて見直してみました。個人的に、1年生から4年生の既習事項の中から、十分に面白い授業ができるのではないかと思います。読み方・発音の違い、中国語のことわざ、カタカナ文字と中国語の当て字、主語述語の語順、熟語などは授業で取り上げると面白いかなと感じています。さらに教科書外では、日本から中国に渡ったアニメ（例　ドラえもん）なんかも、子供にとって身近なので取り上げたら面白いかなと思っています。具体的な授業の進行に関しては、今後また相談させて頂けたらと思います。非常に有意義な論文で、正式に私が先生になってからも参考にしたいと思います。*

11月に入って、授業案のブレーンストーミングを二人で行った。授業日を考えると、国語の授業で「季節の言葉・冬の風景」のすぐ後になるため、その延長線上として、繋がりそうな「冬の言葉」を授業の最初に導入することを決めた。授業の目標を、「2文字の漢字熟語から、ことばの組み合わせ方の共通点を見つけることで、日本語と外国語に興味・関心をもつことができる」とした。4年生の子どもたちの既習単語を参照し、問いかけ一つ一つの子どもたちの反応を予想しながら、学習活動を組み立ててみた。創意工夫しながらアイデアを出し合ったり、また子どもの実態に沿っていないためそのアイデアを撤回したりするなどワクワクしながら、構想を立てていった。このような作戦会議を経て、12月中に指導案をさらに練り上げた。1月の授業日の二日前から模擬授業を行った。前日の夜まで、各活動の時間配分、板書のデザイン、授業の流れのリハーサルなど細かいところまで練られた。

2）現職教員たちとの Team Teaching による中学校1年生英語科の授業実践

この中学校の授業実践は、現職教員たちとの協働実践である。福井に来て、学校訪問する際、必ず「英語の授業はもちろん、中国のことや、国際理解に関わることで私ができることがあれば、協力しますので、ぜひ相談してください」と声をかけている。少しでも自分ができることなら、貢献したい気持ちはあるが、なかなか声をかけてくれない。初めて行く学校でよく聞かれるのは、「いつまで福井にいますか」。恐らく、外国人の自分が福井に長くいられない、持続性がないだろうと、自分との関わりを避けようとしているのかもしれない。正直なところ、不安定な雇用のため、いつまで福井にいられるのか自分でも分からない。だが、少なくとも、ここにいる間には、できることをしたい。学校側が戸惑い、遠慮しているかもしれないが、私ができることは、繰り返して先生たちに声をかけることである。転機が訪れたのは、2019年1月頃だった。中学1年生の英語科 Unit 9 の単元『チャイナタウンへ行こう』で、中国のことを紹介してほしいという相談を受けた。

嬉しい限りであった。自己流のしつこい声かけの「効果」が現れたのだった。2018年の6月に、先生方に以下の連絡をしていたことが、翌年の1月になって、実を結んだのである。相談がきたことが嬉しくて、嬉しくて、すぐさま授業デザインに取りかかり、没頭した。

> *7年生のunit 9 中国の文化という単元があると思います。私でよろしければ、中国文化の紹介などALTとして先生方の授業に入ることが可能ですので、授業プランのアイデアも一緒に考えましょう。また、単元ごとでプレゼンの聞き手やインタビューの相手などが必要な場合、いつでもいいので、気軽に声をかけてください。もし子どもたちが中国語に興味がありそうでしたら、対応可能なので、相談してください。*

授業づくりの手がかりは、英語教科書に掲載されている中国語の意味を英語で当ててみようという漢字クイズの内容から掴んだ。確かに同じ漢字でも日本語と中国語によって違う意味を持つことがある。漢字クイズを出しながら、漢字の不思議な世界を開くような授業を作っ

ていきたいと思っていた。本来であれば、私は、特別ゲストとしてT2になるつもりだが、指導案を作った自分がT1で、英語科の先生がT2となり、二つのクラスで行うことになった。この発問に対して、生徒がどう反応するだろうか、この単語が生徒のレベルに合っているかなどいろいろなことについて先生の意見を聞き、前日の夜中まで授業案を修正し、打ち合わせをした。

1.机	□desk	□airplane
2.湯	□shower	□soup
3.汽車	□bus	□car
4.作業	□practice	□homework
5.去英国	□come from the U.K.	
	□go to the U.K.	

New Horizon 1: P98

Ⅱ．理論と実践の往還：母語と連携する外国語教育

日本で小学校外国語活動・外国語科の先行実施が始まった。学級担任が英語を指導する中、学級担任の強みを活かした小学校ならではの外国語教育の在り方を具体化していく必要がある。次期学習指導要領において、小学校外国語には「日本語との違いを知り、言語の面白さや豊かさに気づく」、「日本語と英語の語順の違いなどに気づかせる」という文言があり、一方、小学校国語には「言語能力の向上を図る観点から、外国語活動及び外国語科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにする」との提起がある。これらに共通するのは、母語と外国語を有機的に関連づけた「**ことば**」という視点の存在である。私は、「ことばの教育」という観点から、母語と外国語の連携によりことばへの気づきを育てることが大事だと考えている。

母語と連携する外国語教育の必要性は、理論的・実践的な根拠が示されている。柾木（2015、2016）は、国語教育と外国語教育の連携に向けた動きを明治期に岡倉（1894）が提唱した国語・漢文・外国語の「連絡」まで辿り、歴史的観点から整理している。大津（1989、2008）は、学校教育における外国語学習の第一義的意義は母語を相対化するための手段であると位置づけた上で、「**ことばへの気づき」を育てる**ことと英語の熟達度の間には有意な関係があり、母語と外国語の効果的な運用を主張している。また、欧州で蓄積されてきた複言語複文化主義教育、具体的には母語と複数の言語を観察・分析・推論する「**言語への目覚め活動**」が日本の小学校外国語活動に応用可能であるという提起もある（岩坂・吉村、2015；大山、2016）。日本の英語教育を慎重に議論してきた4人、鳥飼・大津・江利川・斎藤（2017）は、英語だけの外国語教育が失敗すると懸念し、**複言語主義**を勧めている。

バイリンガリズム教育・移民の子どもの言語教育を研究してきたCummins（1979）は、母語を排除する第二言語教育を批判し、母語と第二言語の基底部分が共通する「相互依存仮説」を提唱した。母語が第二言語の獲得に好影響を及ぼすことを検証した。さらに、日常の会話能力を指す対人伝達言語能力（BICS: Basic Interpersonal Communicative Skills）と学問的な思考言語能力を指す認知学習言語能力（CALP: Cognitive Academic Language Proficiency）の区別を意識する必要性を提示した（Cummins, 1984, 1986）。これらの論述では、日本に関する事例が言及されていないが、日本の外国語教育を議論する際の大きな示唆となっている。

母語と連携する外国語教育の在り方が議論される中、国語科と英語科におけるメタ文法授業の試みが行われた（秋田ら他、2012、2013、2014; 斎藤ら他、2012、2013）。プロジェクトでは、中等教育における、言語横断的に働くメタ文法能力の育成に焦点を当て、国語と外国語が連携するデザイン授業が開発され、アクションリサーチが行われた。その結果、生徒たちのことばの仕組みや働きへの意識が高まったことが実証された。さらに、王（2017、2018a、2018b）は、小学校において、複言語主義の視野を取り入れたことばへの気づきを意識した国語・英語・中国語が連携する教材の開発及び授業の可能性を検討した。具体的には、日本の小学校の国語の教科書を分析し、外国語学習と結びつけられる題材を提案した。これから、**国語・英語・中国語を取り入れた小学校4年生及び中学校1年生の実践事例を通して、協働的実践研究の在り方を振り返る。**

Ⅲ．教科書を生かした母語と連携する授業実践の展開

1．外国語活動「ことばの気づき」小学校4年生

この授業の実践記録は池田院生の長期実践研究報告書（池田、2018）に書かれているので、ここでは、細かい記述を割愛する。本節では、池田院生の省察を手がかりに、自身の実践を振り返る。

1）「えー中国語！中国語！」とざわつき、興味を抱く

本時で何を学ぶかを知る場面。冬の風景の授業で、白いモノを見たら冬を感じるとあったので、「白」という漢字に注目して勉強するという発想だった。国語の冬の風景の授業でどんなことばがでてきたかという先生の問いかけに対して、子どもたちは、雪合戦、雪かき、雪だるま、と答えた。「共通しているものはなんだろう」と聞くと、「雪」と出た。さらに、「雪は何色」と聞いたら、やっと「白」にたどり着いた。そこで、**「白」で始まる漢字の組み合わせから、日本語・英語・中国語について考えよう**という本時のめあてを黒板に貼った。めあてを貼った直後、子どもたちは、自発的に読み始めた。みんな「えー中国語！中国語！」と隣の人と一気に話し始めた。当時の様子を池田院生は、このように書いている。

> *めあてを子どもたちが自発的に読んだのは、きっと「外国語？何するんだろう」という気持ちの高ぶりがあったからだろう。そして「中国語」というところに驚きがあったのだろう、声が一気に大きくなった。また、一郎くんが両手でガッツポーズをしている。彼の中で面白そうだと直感したのだろう。子どもにとっての「興味を抱く」の段階である。*
>
> *（池田、P64）*

「日本語、英語はなんとなく分かるね。中国語を、今日はやっちゃおう」という先生の発言に対して、子どもたちは、「やったー」と興味を示してくれた。一郎くんが、拳を上に突き出すのが見えた。池田院生が「今日スペシャルゲストに来てもらった」と知らせると、子どもたちから拍手が起こり、その拍手と共に私が登場した。自己紹介は、間違ったふりをして、中国語のあと、英語、そして、日本語で3回演じた。自分の名前を紹介する際、「漢字は日本語と同じなんですけど、発音は中国語の発音となっています」と言った。池田院生は、子どもたちの呟きを拾い、記録していた。

> *王先生の「漢字は一緒だけど、発音は違う」の部分で、子どもが「なんで？」とつぶやいた。王先生は意図的にその発言を流したと推測される。言葉の源流に遡ることで、国語の「漢字の成り立ち」「白川文字」、6年生社会科の日本の歴史（中国との交易）などにつなげることも可能なのだが、今回はそうした歴史ではなく、ことばそのものに焦点をあてたかったからである。このように中国語を取り扱うことは、色んな他教科との関連を図れる可能性を秘めていると教師として感じた。*
>
> *（池田、P65）*

実際に、私は、「なんで？」という子どもたちの呟きに気づいていなかった。気づいたとしても、次に行くか、ここで議論するか、どうするべきかを悩むことになっただろう。改めて、池田院生の記録を読んで、彼の、授業をしながら子どもの様子を見取る力に感心した。

2）白イルカ、白目、白ほうと 次々に書き単語に出会う

子どもたちを4人グループに分け、「白で始まる漢字を集めてほしい」と画用紙を配布し、3分間を設定した。数多く書くことを目指して、各グループは作戦を取っていた。辞書で調べて、白の漢字を探すグループ、社会科の教科書を取り出して、地方の名前や神社の名前から単語を取るグループ、「白山」がはくさん、しらやまの二つの発音ができることから、読み方まで書くグループも出た。8班の内、少ない班は4つ、多い班は8つを探すことができた。

1班：白鳥　白山　白菜　白熊　白飯　白海豚　白黒
2班：白鳥　白山　白菜　白熊
3班：白鳥　白山　白菜　白熊　白目　白人　白紙
4班：白鳥　白山　白菜　白熊　白組　白玉　白川郷　白神山地
5班：白鳥　白菜　白熊　白組　白衣　白酒　白米　白紙
6班：白くま　白山神社　白ほう　白鳥
7班：白山（しらやま）　白山（はくさん）　白竜（しろりゅう）　白玉（しらたま）　白雪姫（しらゆきひめ）
8班：白鳥　白山　白菜　白玉　白衣　白紙　白目　白身

各班が書いた画用紙を黒板に貼り、共通することばから、「白鳥」と「白紙」を取り上げ、さらに池田院生が事前に準備した「白馬」と「白旗」で考えようとすることにした。既習単語から予想していた「白馬」と「白旗」が子どもたちから出なかった。ここでは、柔軟に子どもたちの答えに変えることも考えられたが、次の授業展開で扱う三つの言語を比較するのに適例だということから、こちらが考えた2つの単語を加えることにした。

3）白は英語でホワイト、中国語でバイということを発見する

「白鳥」「白紙」「白馬」「白旗」を黒板に書き、それぞれの英語を全体共有で確認した。子どもたちは、白を、英語でホワイトというのを知っていた。白鳥をホワイト・バ

ードといった子どもたちに、「バードとも言う。でもここでは、スワンって書く」と池田院生は言った。理由は、ホワイト・バードだと白い鳥を意味し、白鳥であるスワンを特定できないから、語彙の混乱を防ぐためあえてスワンにしたとのことである。実は、当日の事後授業研究会で小林和雄先生が直訳すると間違いが生じる場合もあると指摘した。一方、間違いから学ぶチャンスだったと振り返った。4つの単語の英語（white swan、white paper、white horse、white flag）を確認し、「私たちが考えた英語が外国人に本当に通じると思いますか」と問いかけ、子どもたちに挙手してもらった。彼らはほとんど通じないと思っていた。私が、「全部通じます」と答えると、半数以上の子どもたちが驚いていた。

続いて、4つの単語の中国語での言い方を、私が解説した。多くの子どもたちは、私の真似をして、自発的に中国語を発音していた。せっかく興味を持ってくれていたが、私は大きなミスをしてしまったことに気づいた。それは、該当する中国語の漢字ではなく、ピンインを音訳したカタカナを黒板に書いたことであった。そのことに気づき、日本語を指して、「中国語も同じ漢字、これも中国語になっています」と言い足した。池田院生は、「中国語では、全部漢字です」と補足し、子どもたちの反応を記録した。

> *子どもたちは、日本語の語順で通じることには驚きを示した。続く王先生の後の説明で、日本語の漢字がそのまま通じることに対しては、この日一番の驚きを表していた。この驚きは、まさに「言葉への気づき」が子どもたちの中に生まれた瞬間であった。子どもたちの「もやもや」が「新発見」の段階に入ったといえよう。*
>
> *（池田、P68）*

子どもたちが全部漢字の中国語に対して、興味を示してくれたことから、池田院生は臨機応変に「私は先生です」という文の日本語表記と中国語表記を提示し、日本語の文字が中国でも通じることを説明した。

私は先生です。 我是老师。

4）疑問、分かったこと、気づいたことを共有する

ここまで行い、気づいたことをペアで考える時間を設けた。最初は「わからーん」と言い出す子がいたが、徐々にペアワークで活発に話すようになった。意見を共有する時間に、子どもたちから以下の意見が出た。「韓国や北朝鮮でも漢字を使っています。韓国語は、日本語と読み方は違うけど、中国語だと読み方は同じ？」;「日本語の「一」の字は、中国語でも同じなの？」;「日本語も、中国語も、英語も、最初が一緒。」。この最後の発言を拾い、池田院生は、子どもたちとの会話によって「色+動物/物」が1つの単語になっていることへの気づきを導いた。

T さっき、言ってくれた、この最初の文字が同じで、うしろが違うってどういうことなんやろ。最初の一文字目かな。最初の一文字目って、何が来てる？誰か他に？最初の一文字目に、こういうのが来てるっていう。 C　ええぇぇ（意味が分からん風） T　（白を指しながら）これ何？ C　白 T　白って何？ C　色 T　うん。最初の一文字目って、色やね。じゃあ、（鳥を差しながら）後ろに来てるのは？ C　鳥 T　鳥って何？ C　動物 T　馬は？ C　動物 T　これは？ C　紙 T　紙って？ C　木材　文房具 T　文房具って？ C　鉛筆とかって何？ C　木ー！ T　木とかって何？ C　ええええー！ T　じゃあ、旗は？ C　（口々に答える）物 T　誰か今教えてくれた。3人ぐらい言ってくれた。物。 C　物？ T　例えば、（板書しながら）色と動物。色と動物とか、色と物、色と物、うんうん。こういうこと言えるかな。色と動物とか、色と物をくっつければ、言葉になる。そしてそれが、日本語でも、英語でも、中国語でも、通じるってことが、分かるな。 （授業の文字起こしより）

対話記録で示されているように、先生の意図が鮮明に出されている。やや無理やりな部分が感じられるかもしれない。授業目標を忠実に達成するか、子どもの思考に添いながら自らの発見を待つか、両者のバランスを絶妙にとるのが極めて難しい。このような高度な実践力は、日々

の授業実践を通して、試行錯誤によって、実践の省察とともに、鍛えていくしかない。

5）漢字づくりに挑戦してみる

黄葉 赤飯 黒板 青空 黒豆、黒板 赤飯 紅葉 太陽 水星 金星 地球 火星 木星 土星 惑星 宇宙 白熊 緑茶 赤飯 赤飯 青鬼 黄葉 金属 赤道 青春 白馬 銀魂 金紙 黄葉 黒猫 銀紙 青空 白山 赤道 黄葉 茶うま 白黒 金のライオン 赤のゴリラ 黒い星 緑葉 赤飯 黄葉 赤葉 赤道 赤道 黒人 青空 赤飯 黒板 青色 赤鼻 赤服 赤道 赤花 赤血 黒板 黒目 黒豆 赤道 白玉 赤飯 白山 白旗 青空 赤道 黄葉 茶馬 黒髪 赤道 黒熊 黒豆 緑葉 赤飯 赤飯 赤道 黄葉 黒板 北海道 北極 北国 北斗星 青空 真っ青 青菜 黒豆 黒板 青星 赤石 茶飯 青森 白菜 緑葉 赤道 赤道 青春 黒板 赤飯 青組 黒川 黒服 黒湯 黒鬼 金庫 金色 金属 青春 黒紙 赤道 赤飯 紅葉 黒豆 金貨 金庫 金箔 黄葉 赤飯 黒板

子どもたちのワークシートより

漢字づくりに挑戦する前に、池田院生が二つの例「青空」「緑茶」を出した。青→青空→blue sky→青空（qīng kōng）；緑→緑茶→green tea→緑茶（lǜ chá）のように板書した。これらは、「色+動物/物」になっていることを伝えると、子どもたちの気づきの声が上がってきた。「色と何かを組み合わせて、言葉を見つけてみたりして下さい」と指示し、ワークシートを配布した。子どもたちが書いている間に、池田院生が机間支援をしながら、見つけたよい例を全員と共有していた。最後に、振り返り文を書かせて、授業を終えた。

32人の子どもたちは、120個の漢字のことばが書けた。「色+動物/物」に限定したことで、子どもたちの発想を制限したのではないかと心配していたが、脳みそを総動員して、たくさんの言葉を書いてくれた。個人の狙いとしては、オリジナルな単語や言葉を作ることを目指していた。語と語の組み合わせで新しいことばができることに気づき、自分なりに新しいことばを作ってみる創作活動をしたかった。だが、授業者の池田院生が、範囲が広すぎると分からなくなる、4年生にとって難しい、という意見を私は尊重した。子どもたちは、それぞれ、自分の言葉で多様な視点から授業を振り返っていた。子どもたちの気持ちに応えながら、全員のワークシートにコメントを書いて返した。

6）振り返り文から授業を再考する

振り返り文の中にあった、ことばの仕組みに関する記述は、興味深かった。「色＋物で言葉ができることを初めて知りました。日本語は白、英語はwhite, 中国語はbaiなど、白は外国語でも決まっているんだなあと思いました。」；「日本語は漢字とひらがながまじって“今から遊びにいきます”とかになるけど、中国語は全て漢字なので、びっくりしました。」；「白鳥で中国語だったら別の意味のばいやニャオ（白鳥の中国語発音）べつべつの意味をつなげてすると白鳥と読めるなんてびっくりしました。」；「日本語には白でも読み方はいろいろあるけど英語と中国語はよみかたが1種類しかないのが疑問におもいました。」；「赤色や青色などの色はなにかと組み合わせて英語や中国語にできるなと思いました。」といった共通する語と語の組み合わせだけではなく、文づくりの構造、発音体系、日本語の特徴である膠着語まで考えた子どもがいた。

また、複数の言語を比較する視点は、大半の記述に見られた。「中国語、英語は日本と同じ最初の色とかの意味は同じということが分かりました。でもなんで外国や中国の字は全然違うかなと思いました。」；「中国の漢字はなんで日本の漢字と違うのかなと思いました。」；「中国のほとんどが最後に「一」になることが分かりました。ワン先生とわたしの滑舌が全然違いました。」といった複数の言語の違いだけではなく、共通点もあることに気づいていた。

外国語への興味を示した記述は一番多かった。「中国語は日本語とすこしにている部分があることが分かりました。いただきます や こんにちは はどうやっているのかしりたいです。」；「中国では全部の文字が漢字なんだなとおもい、ぼくも中国の字をならってみたいです。発音もむずかしいからすごいです。」；「もっと中国語をしりたい」；「漢字は日本、中国のどっちからきたのか疑問です」；「中国でもだいたいはなんてかいてあるかわかるんだなと思います。」といった意外に中国語の漢字もわかる、もっと外国語を知りたいという気持ちが書かれていた。

当日の授業を公開し、浅島院生、山岸院生、山崎院生、中山院生、校長先生、教頭先生、担任の先生、小林先生、合計8人が参観した。授業の直後に院生たちと事後授業研究会を開き、検討会を行った。

7）「充実感あり 満足感ない」池田院生の省察

池田院生は、今回の授業で子どもの中に起こった情動を、興味を抱く→もっと興味を抱く→表現する→確認する→発見する→モヤモヤする→新発見する→公式化する→理解する→理解したことを表現すると捉えた。充実感が得られたのは、前日まで入念に打ち合わせができ、時間のシミュレーションと発問が頭に入っていた。故に、授業中に子どもの様子や反応を見ることができ、即興的な発言を有意義な方向に導くことができたためである。参観者から、“見たことがない授業”、“池田さんらしい授業”、“参観者も驚きを持てた授業”といった褒め言葉が、やってよかったと思う充実感に繋がった。一番うれしかったのは、子どもたちが楽しそうに、そして驚きながら授業を受けていたことだそうだ。特に、普段国語の時間によく寝ていた女の子が、今回の授業で目を輝かせて、「韓国や北朝鮮でも漢字を使っています。韓国語は、日本語と読み方は違うけど、中国語だと読み方は同じ？」と発言し、最後まで学習に臨んでいたのが印象的だったそうだ。少なくとも彼女の中に外国語への興味が芽生えただろう。

また、自身の省察としては、これまでしたくてもできなかったことが二つ実践できた。一つは、中国語を絡めた授業ができたこと。中国語が学校現場で必要ないプラスαの力だと思っていたが、今回の授業のように、日本語・英語・中国語の 3 カ国語を外国語活動の一貫として扱ったことで子どもたちがことばに出会う機会となり、他教科との関連も十分考えられた。もう一つは、実践コミュニティづくりのヒントを得たことである。校長先生やメンターの先生、大学の先生とチームを組んで実践できた。現場の先生、大学の先生、自分の意見をぶつけ合わせ、再構築を繰り返した結果、こうした授業ができた。木曜日カンファレンスで学んだ協働実践の意味と必要性を実感し、自分にとって、小さいが確かな実践コミュニティを組織することができた。

満足感がないと思ったのは、授業の改善点が多かった。授業中に「言葉」「単語」「言語」「ことば」を混ぜて使用したことで、子どもたちを混乱させてしまった。子どもたちにとって分かりやすいことばを見つけることができず、発問が長くなり、問いの鋭さがなかった。また、こどもたちの発言を板書する時、次の段取りを考えていたため、発言の真意を確認しないまま、意味を間違って捉えた。そして、グループ活動を取り入れたが、もっと精度を上げることができた。例えば、グループで出た漢字が、英語にも中国語にもあるのかを話し合って、そこから共通点を探して結論に持っていく方法があった。

教科の授業と違って、この授業は確固たる答えはなかった。ことばとの出会いから、言語に対して、子どもなりの興味関心を抱くことができたら、よいと思っていた。授業の最後にまとめる難しさを感じたが、子どもたちがもがいて、さわいで、静かになって、考えて、動いた授業だからこそ、本当の主体的な学びに繋がるのではないかと考えた。今回の実践を通してやる価値があると思ったからこそ、これからもこのようなチャレンジをもっと続けたい。

2．英語科「不思議な漢字の世界」中学校 1 年生

中学校 1 年生の授業実践は、二つのクラスで実施したが、内容はほぼ同じであるため、ここでは、一つのクラスに絞って授業の様子を紹介する。中国文化、中国語を扱った単元にゲストとして来てほしいというリクエストに応じ、活動内容を組み立てた。先述した小学校での実践と違い、この授業は、私が T1、英語科の先生が T2 で、事前に授業構想を共有し、前日打ち合わせの後、当日の授業に臨んだ。本来であれば、先生たちの授業構想を聞いて、自分が協力するところや出番を考えるべきであり、今回はまるで丸投げを受けた出前授業のように思われるかもしれないが、真の協働実践研究に近づく一歩だと考えた。

1）自分の名前を中国語で言ってみよう

教室に入った瞬間、生徒たちが大変疲れているのが分かった。年明け一週目の金曜日の 6 限目だった。挨拶で how are you と聞いたら、sleepy と答える子が多かった。授業中私は all English で話し、英語の先生が必要に応じて支援するということが事前に決まっていた。生徒とのやりとりをしながら自己紹介をしていると、「早い、リスニングより早い」とつぶやいた生徒がいた。自分も緊張していたから、無意識のうちに英語を話すスピードが速かったのだろう。そこで、戸惑っている生徒に、「自分の名前を中国語で発音してみよう」と誘って、何人かの生徒が前に出て日本語の名前を書いてもらった。彼らは、私と 1 対 1 で発音練習してから、全員に向けて、中国語で自分の名前を言った。聞きなれていない中国語を発音することでみんなの集中力が高まり、教室の雰囲気が明るく変わった。

2）中国の地図から都市を探してみよう

自己紹介の次に、私が生活していた複数の都市を中国地図から見つける活動に移った。活動の狙いとしては、私の実体験から中国の都市に触れること。4 人グループになって、A3 一枚の地図をペアごとに配った。この活動は、

私が、英語で「生まれた都市」、「育った都市」、「大学/大学院を過ごした都市」、「日本語を学んだ都市」を一文ずつ言い、スライドの提示とともに、生徒たちに場所を見つけてもらうことをした。つまり、英語を聞いて、日本語を見て、中国語の場所を探すという多言語が混じった活動になっている。しかし、一つ大事なことを見落としたことに気づいた。それは、中国の都市の漢字が日本語の読み方と中国語の読み方と違うことであった。英語は中国語の発音になっている。生徒に、中国の漢字と日本語の読み方とが一致しない混乱を招いた。英語で説明するため、提示したスライドを日本語にしたが、却って難しくなった。生徒たちは、漢字に頼って、すべての都市の場所を見つけたが、私のミスに付き合ってくれた彼らに申し訳ない気持ちになった。

3）『春暁』を中国語で音読して気づいた

面白みに欠けた地図の活動でつまらなそうな顔をしている生徒が出てきたところに、彼らに馴染みのある『春暁』の教材を提示した。テキストは小学校 5 年生の教科書からとった。復習の意味で音読した後、中国語版の『春暁』を示し、音読した。同時に両者を比較するワークシートを配布して、「何が違う？何が同じ？」と問いかけた。

「何が違うか」に対して、生徒の多くは、様々な違いに気づいた。読みかたが違う、中国語にひらがながない、並び方が違う、漢字が少し違う、文の順番（文章の単語の並び順）が違う、高低差がそれぞれの文字にある、リズムがいい、音の高低が激しい、日本語は間をあけて読むが、中国語はつなげて読む、漢詩→絶句；上がったり下がったりしている、中国語の読み方がローマ字と似ている、送り仮名がない、書く順番が違う、横書きと縦書き、否定の文は不をつける、中国語が文字数が同じ一行五文字、「 ¯ ´ ˇ ` 」の四つの記号がある、中国語の発音仕方に h が多く使われている、訓読みの漢字が違う、など、読み方、書き方だけではなく、漢詩の文体、音素にも関わる記述があった。中には、否定形に関して、「不は否定⇒覚えず」と日本語の既有知識とリンクした気づきもあった。また、文構造に関して、「“～を” が述語の後にくるのは英語と同じ？」と疑問がわいた生徒もいた。さらには、図式で中国語と日本語の文型をまとめ、英語まで例を挙げた生徒もいた。

述語→主語（形容詞）
英文と同じ形
⇩
否→述→主（形）
don't　go

「何が同じか」に対しては、違いほどの数ではないが、「眠」の音読み「みん」と「mián」が似ている、文末符号「。」が同じ、漢字の意味がほぼ同じ、イントネーションが似ている、母音の読み方が同じ（くり返し処処＝chù chù）、漢字の熟語は発音が似ている（春眠、夜来）など発音に関する記述がほとんどであった。中には、同じ漢字だが、日本語の読み方が多種であるのに対し、中国語の読み方は一つしかないことに気づいている生徒や、同じ発音をする中国語の違う漢字をまとめている生徒を見て、私は、彼らの鋭い気づきに驚いた。

（あかとき、あかつき、きょう）暁＝xiǎo
（お、こ、しょう）小＝xiǎo
（ふう、かぜ、かざ）風＝ fēng

また、記述文を書いていなかった生徒が実に高度な思考を駆使していたことが、授業中につぶやきやワークシートの痕跡から分かった。彼が線引きしていたところを辿ってみると、「暁」と「暁」のような簡体字と日本語漢字との違い、「春眠」「処処」「夜来」「花落」の音読みと中国語発音の類似、不を使う否定形、「啼鳥を聞く」と「聞啼鳥」のような文構造の違いに気づいていることが伺えた。それは、思考を可視化する目的からワークシートづくりを工夫したことにより、分かったことである。

4）カルタゲームで聞き取れた中国語カードを選ぶ

生徒が中国語に興味を持ってきたところで、実は分かる中国語があるんだという外国語に対する親近感を持たせるため、中国語を聞き取るカルタゲームを導入した。生徒4人のグループに、中国語を書いたカード10枚を一セットずつ配った。表は漢字、裏面はピンインを書いた。選んだ単語は音読みで中国語の発音と似ている、更に日本語との意味も同じである。このゲームは盛り上がった。ほぼ即答で正解のカードを見つけられる単語があったが、ちょっと難しい単語もあった。その後、いくつかのカード単語を例として、日本語と中国語の発音を比べて聞かせ、その違いに目を向けさせた。

5）中国語の意味を当ててみよう 漢字クイズタイム

中国語も発音はほぼ同じだという親近感が漂う雰囲気になってきたところで、中国語では違う意味を持つ漢字があるという漢字クイズを出した。よい揺さぶりになると思い、同じ意味を持つ漢字を混ぜたが、予想していた反応は出なかった。理由は二つあると反省した。一つは、中国語に今まで触れたことがない生徒たちがいきなりたくさんの中国語を見せられ、聞かせられ、盛りだくさんの内容を短時間に提示され、量に圧倒されてしまったのだろう。もう一つは、漢字クイズの出し方にある。一つの漢字に二つの意味を用意し、絵で表したのだが、意味が不明瞭な絵があった。授業の後半になって、駆け足でスピードを上げたのも理由の一つとして考えられる。

6）文づくりに注目しよう

「私は田中です」「我是田中」「I am tanaka」

「とても元気」「很好」「very good」

最後に、中国語の豆講座として、自己紹介文を示した。授業の最初に中国語の発音で自分の名前を披露した生徒たちにもう一回登場してもらい、中国語の自己紹介文を言ってもらった。日本語・中国語・英語の自己紹介文を並べ、文づくりに注目させた。一人の生徒は語順の違いに気づき、日本語だけが仲間外れだと発言した。そして、三つの言語には違いだけではなく、共通することもあると示したくて、「とても元気」「很好」「very good」を並べたが、時間切れで意見を共有することができなかったが、今日の授業を踏まえて振り返りを書いてもらった。生徒のワークシートの振り返り文から、「どちらも形容詞は先である」という記述があった。

日本語だけは文法が違う。英語と中国語は先に主語と“です、am”が来るけど、日本語は最後に“です”が来る。

7）日本語・中国語・英語を比較して、気づいたことや感じたことを書こう

文型 SVO について、「中国語や英語は述語が先」という語順の違いに気づいた記述が多かった。**日本語の規則性、独特性に注目していた意見が見られた。**例えば、「日本語は『は』や『が』などのことば（単語をつなげる言葉）があるけど、中国語や英語にはそういう言葉がない」;「日本語のように『を』『の』『く』などを使わずに中国語は漢字だけで英語も単語だけを使ってしゃべっていること」などである。

また、日本語の成り立ちに気づいた生徒がいた。例えば、「日本語の中にも中国語や英語が混じっていたりする」;「漢字の起源、中国人などを含む渡来人によって文字を教わり、その字が漢字だったからにているのでは」;「日本語は漢字とひらがなとカタカナを使っている」などである。

発音への気づきは、中国語だけではなく、英語に言及した記述があった。「日本語と中国語は漢字でまだ分かるけど、英語は、アルファベットで発音と意味が違う」;「英語の発音は中国語とはアルファベットでもちがう発音をしていて意外だった」などである。特に発音が独特で興味を持ちました」。そして、自分の名前を中国語で言ってみた二人から、次のような感想があった。それは**発音の仕組みを自分なりに考えたり予想したりすることの楽しさを味わうこともものであり、そのことは、言語を分析する力に繋がり、言語力の基礎を築く基盤となるものである。**

読みかたとして「小坂」でショウバンというのは、ショウは似ているなと思いましたが、バンについては「反」だけでバンだからかな？など予想するのもたのしかったです。

私は「酒井」ですが、中国語で表すと自由人みたいな発言の仕方をし、とても面白かったです。また中国語でも日本語に近い言葉もあり覚えました。中国と日本は言葉が少しだけにていて面白いなと思いました。

三つの言語に触れることから、言語観や言語そのものの豊かさに気づいた記述が見られた。個別の言語からすべての言語の面白さや奥深さに感心し、言語を通して文化、歴史、民族への理解が深まる機会となった。「日本語と中国語の発音は少し違っても意味が同じものが多くて驚いた。英語は英語なりの発音などがあって、世界にはたくさんの言語があって面白いと思った」;「日本語と中国語は違うところも同じところもあって、兄弟みたいだと感じた。どの国の言語も大切にして、言葉を楽しみたいと思う」;「中国語と日本語の意味はほとんど似ているが、似ていないものは大きく違うのでそこに気をつけなければいけないところが中国語の面白さだと感じた」;「ことばの世界はおくぶかい」;「言語はすごい。民族によって言語が違うのに通じ合えた」;「中国と日本の古くからの関係が見えた1時間になった」。

複数の言語を比較することが、次の言語学習の動機づけになるきっかけになったことが分かった。外国語への興味がわいたことや特定の項目に注目したい、何かについてもっと知りたいという意欲の向上にいい影響を与えた。「中国語への興味がわいた」;「普段はあまり関わりのない中国語なので、もっと知りたいと思った。もっと違いを見つけていきたい」;「中国に行ってみたい。母・子音の異なりにも注目したい」;「中国語をゆっくり読むと日本語に聞こえたことをかるたでしたり、中国の文字の意味をクイズでやってとてもおもしろかったです」;「英語は共通だが、中国での英語のしんとう率が気になった」;「日本語と中国語はいままでまったく違うものとしてうけとっていたけど、今回の授業を通して似ていると感じました。かるたが楽しかったです。ちなみに一番の答えはなんだったんですか」。

8)「悔しさから乗り越えよう」授業者としての省察

今振り返ってみれば、英語で中国語を教えたり、三つの言語の違いに気づかせたりとハードルが高い授業だったと思う。せっかくの機会なので、生徒にいっぱい言語体験をさせたくて、盛りだくさんの内容を無理やりに入れてしまった。45分の授業で学習活動だけを数えると、名前を中国語で言ってみよう、地図で中国語の都市を探してみよう、漢詩の中国語版と比較してみよう、カルタゲームで中国語の漢字カードを聞き取ろう、中国語の漢字クイズをやってみよう、中国語で挨拶してみよう、英語・中国語・日本語を比較してみようと7つあった。私の無茶ぶりに付き合ってくれた生徒に感謝する。あまり発言者が多くなく、途中から飽きた子が次々と出てきたため、授業後も不安があった。その時、先生に「やっぱりオール英語で難しかったでしょうか。小学生向けに日本語でやった時に反応が良かったんですが、中学校1年生の実態がよく分からず、無理やりやったから、ついていけなかった生徒がいたでしょうか」と聞いてみた。先生は授業のことをポジティブに捉えて、以下の返信で私を励ましてくれた。悔しさがあったからこそ、次の前進に繋がると信じている。

4月から1年生を見てきていますが、決して興味がわかなかったわけではありません。子供たちはみんなの前で間違うことに抵抗がある傾向が強いというのがわたしの実感です。大人からすれば、かしこい頭を持っているんだからどんどん発言すれば良いのにと思うんですけどね。英語は何となく意味はわかっていても、母語ではない分、余計にその傾向が強いかもしれません。今は間違ってもいいんだよという授業の雰囲気、クラスの雰囲気を作っている途中なので、そのせいで反応が悪かったなぁと残念な気持ちにさせていたらごめんなさいね。でも、金曜日の6時間目だけど、顔を上げて取り組んでいたし、わたしとしては、自分では絶対にできない中国語や中国文化など、自分の関わっている1年生の生徒たちが触れることができてとてもありがたかったです。大学生ぐらいになり、中国語に触れたり、わたしみたいに中国のお友達ができたりしたときに、昨日の1時間をふと思い出す子が必ずいると思います。その日にこちらが期待する結果が得られなかったとしても、教育は将来に生きるときが必ずくるといつも思っています。ありがとうございます。

Ⅲ. 省察のあとがき

複言語主義の視点から、「ことばへの気づき」、「言語への目覚め活動」に焦点を当てた、母語と連携する外国語教育の協働的実践研究を二つ事例として取り上げて紹介した。どの実践も細かく分析し検討する価値があるが、ここでは、協働実践研究の大切さ及び関わり方を振り返るため、概要のみの紹介に留まった。外国語教育の観点から事例を論述する内容は別稿に譲ることにする。

二つの事例研究によって、協働実践研究の大切さを実感した。**一人でできないことがよく分かり、協働の必要性及び重要性を再認識した。**今回の協働実践研究がなければ、子どもたちの素晴らしい気づきや言語への深い理解を知ることができなかっただろう。また、「ことばへの気づき」、「言語への目覚め活動」に関わる言語活動が子どもたちにどのように影響を与え、彼らにどのような学びがあるかが明らかになる可能性が広がった。複数の言語をコラボレーションする取り組みの実践は、意義があり、現場に還元することができる。そして、池田院生の事例のように、実践者がメイン、私がサブという協働の仕方で実践研究を行う協働実践研究は、理論と実践の真の往還を実現可能にするアプローチだと言える。

また、今回は、初めて実践記録を書いてみて、**実践記録のディスコースが存在しているのではないかと考えた。**今まで、伊那小学校の「お店さん」、つくば大学附属小学校の「あそぶものを作ろう」、福井大学附属学校の「スズメノカタビラ」といった授業実践記録の素晴らしさに感心していたが、書き方の構造、ことばのチョイス、子どもの様子の描写、文脈付きの筋の表し方など特徴があり、そこには実践記録ならではのディスコースが共通して存在しているのではないかと改めて気づいた。さらに、実践を書いて振り返ることは、口頭発表より、本題についての考えが深まる触媒だと言えよう。これから、自分の実践記録を書き続け、実践記録のディスコースを探究していく。

6 月から新しい協働実践研究に関わることに恵まれた。公立小学校の担任が外国語活動に力を入れて日々の授業づくりを見つめ直し、授業改善に取り組んでいる。子ども理解及び先生の教育観を理解するため、普段の授業参観をはじめ、先生のやりたいことを聞き出し、悩みに寄り添い、創意工夫を楽しみ、そして成長を見守りたい。そこで起こるエピソードを次回に報告する。

謝辞

協働実践研究にご協力くださった先生方及び生徒の皆様に心より感謝を申し上げます。本研究は、研究活動スタート支援科研費（課題番号 17H06715）の助成を受けたものです。

［参考文献］

Cummins, J. (1979). Linguistic Interdependence and the Educational Development of Bilingual Children. Review of Educational Research, 49, 222-251.

Cummins, J. (1984). Implication of Bilingual Proficiency for the Education of Minority Language Students. In P. Allen & M. Swain (Eds.), *Language Issues and Education Policies: Exploring Canada's Multilingual Resources* (pp. 21-34).Oxford: Pergamon.

Cummins, J. (1986). Empowering minority students: A framework for intervention. Harvard Educational Review, 56, 18-36.

Wang, L.（2018a） Collaboration between L1 and EFL Education in Japan. *The 52th IATEFL International Annual Conference and Exhibition*, Brighton, United Kingdom, April, 2018.

Wang, L.（2018b） Incorporating L1 in EFL Classes in Primary Schools *全国英語教育学会第44回京都研究大会*、京都、2018年8月

王林鋒（2017）「小学校外国語教育における国語・英語・中国語の連携の可能性：ことばへの気づきに着目して」『福井大学初等教育研究』(3), 25-32.

岩坂泰子・吉村雅仁（2015）「言語意識と多様性に対する寛容な態度の育成に向けたことばの教育: 奈良教育大学附属小学校における言語・文化授業」『次世代教員養成センター研究紀要』(1), 101-106.

斎藤兆史・秋田喜代美・藤江康彦・藤森千尋・柾木貴之・王林鋒・三瓶ゆき(2013)「メタ文法カリキュラムの開発：中等教育における国語科と英語科を繋ぐ教科横断カリキュラムの試み」『東京大学大学院教育学研究科紀要』53, 255-272.

斎藤兆史・濱田秀行・柾木貴之・秋田喜代美・藤江康彦・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒 (2012)「メタ文法能力の育成から見る中等教育段階での文法指導の展望と課題」『東京大学大学院教育学研究科紀要』52,467-478.

秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒・柾木貴之・濱田秀行・越智豊・田宮裕子(2012)「国語科と英語科におけるメタ文法授業のアクションリサーチ」『東京大学大学院教育学研究科紀要』52, 337-366.

秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦・藤森千尋・柾木貴之・王林鋒・三瓶ゆき (2013)「文法学習に関わる要因の教科横断的検討：文法課題遂行と有用感・好意度・学習方略間の関連」『東京大学大学院教育学研究科紀要』53, 173-180.

秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦・藤森千尋・柾木貴之・王林鋒・三瓶ゆき (2014)「メタ文法能力育成をめざしたカリキュラム開発：実践と教材開発を通したメタ文法カ

リキュラムの展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』54, 355-388.
大山万容(2016)『言語への目覚め活動―複言語主義に基づく教授法―』くろしお出版
池田丈明（2018）『組織と格律：テレビから教育へ』福井大学連合教職大学院長期実践報告書
鳥飼玖美子・大津由紀雄・江利川春雄・斎藤兆史（2017）『英語だけの外国語教育は失敗する：複言語主義のすすめ』ひつじ書房.
柾木貴之（2015）「国語教育と英語教育の連携前史――1901年から戦前までを対象に」『言語情報科学』13, 67-84.
柾木貴之（2016）「国語教育と英語教育の連携前史―戦後から1960年代までを対象に」『言語情報科学』14, 71-87.